

[認知症対応型共同生活介護用]

調査報告概要表

作成日 平成20年 2月 27日

【評価実施概要】

事業所番号	(※評価機関で記入) 4672000058
法人名	社会福祉法人 尚徳会
事業所名	グループホーム遊花里
所在地	鹿児島県指宿市山川岡児ケ水1211番地 (電話) 0993-35-0220
評価機関名	特定非営利活動法人 福祉21鹿児島
所在地	鹿児島市真砂本町27-5 前田ビル1F
訪問調査日	平成20年2月27日

【情報提供票より】19年12月31日事業所記入)

(1)組織概要

開設年月日	平成 11 年 10 月 1 日		
ユニット数	2 ユニット	利用定員数計	18 人
職員数	18 人	常勤 14 人, 非常勤 4 人, 常勤換算 8.2	

(2)建物概要

建物構造	鉄骨木造 造り		
	1階建ての	1階 ~	1階部分

(3)利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	21,000特室30,000円	その他の経費(月額)	実費+2,100~3,000円
敷金	無		
保証金の有無 (入居一時金含む)	無	有りの場合 償却の有無	有/無
食材料費	朝食	円	昼食 円
	夕食	円	おやつ 円
	または1日当たり 1,080 円		

(4)利用者の概要(12月31日現在)

利用者人数	18名	男性 0名	女性 18名
要介護1	5名	要介護2	4名
要介護3	8名	要介護4	1名
要介護5	名	要支援2	名
年齢 平均	86.6歳	最低 75.8歳	最高 歳

(5)協力医療機関

協力医療機関名	橋口医院 濱田歯科医院
---------	-------------

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

畑の多いなだらかな丘陵地に建つ、開設9年目のグループホームである。特別養護老人ホームが母体であり、在宅介護支援センター・デイサービスセンター・ヘルパーステーション・訪問看護ステーションを併設し、旧山川町の高齢者福祉を担ってきた。医療との連携も重要視し、嘱託医との連携を密に取り、各ユニットに看護師を配置している。また、ほとんどの職員が有資格者で介護等の経験が豊富であり、質の高いサービスを提供している。これまでの実績を活かし、馴れ合いになることなく積極的に地域との交流を促進し、地域と密着した生活の提供が期待できるグループホームである。

【重点項目への取り組み状況】

重点項目①	前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4)
	<p>昨年の外部評価結果は玄関に置き、職員や訪問者が自由に閲覧できるようになっている。改善すべき点については改善計画シートを作成し、緊急性の高いものから取り組み、すべての項目で改善してある。また、結果は家族にも配布し、運営推進会議でも報告している。</p> <p>今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)</p> <p>今回の自己評価は評価のねらいを伝え、全員で各項目について話し合い、結果をまとめることで職員の理解を深めている。</p>
重点項目②	運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6)
	<p>2ヶ月ごとに運営推進会議を開いている。利用者・家族・地域住民の代表者・行政関係者・副施設長・管理者・計画作成担当者等の参加があり、利用者の生活状況・ひやりはつと報告・地域交流行事・外部評価の結果報告等を行っている。参加者からひやりはつと報告書等について質問があり、説明や意見交換をとおしてグループホーム運営に理解が深まっている。また、公民館長など地域の他の参加者についても検討中である。</p>
重点項目③	家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8)
	<p>入居時の説明書類には、相談窓口と行政等の苦情受付機関を分かりやすく明示している。また、玄関に意見箱を設置して家族などの意見を把握する機会を設けており、提出意見や相談は職員に周知話し合いを持ち、家族に説明するとともに記録として残し今後のサービスに活かしている。</p>
重点項目④	日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)
	<p>当グループホームは特別養護老人ホーム等と同じ敷地内に建っている。畑や駐車場に囲まれ、近隣の民家も少なく地域との交流が難しい。しかし、保育園児や小・中学生の訪問やボランティアの受け入れをしたり、法人全体でコンサートや講演会を企画する等地域との交流を図っている。今後、認知症高齢者について地域の方々に理解してもらい、地域のイベントにも参加したい意向がある。</p>

調査報告書

(部分は重点項目です)

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
I. 理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	「私達の宣言」という表現でグループホーム独自の理念を掲げている。その中に、「家族・地域とのふれあいを大切に」との文言があり、家庭や地域との交流の重要性をうたっている。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	「私達の宣言」は玄関に掲示して、契約時には重要事項説明書等と共にリーフレットとして配布している。また、以前の外部評価後に職員が唱和を行い、毎日理念の確認をするようにしている。日々のケアでも理念に沿った支援を心がけている。		
2. 地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	当グループホームは特別養護老人ホーム等と同じ敷地内に建っている。畑や駐車場に囲まれ、近隣の民家も少なく地域との交流が難しい。しかし、保育園児や小・中学生やボランティアの訪問を受け入れたり、法人全体でコンサートや講演会を企画する等地域との交流を図っている。今後、認知症高齢者について地域の方々に理解してもらい、地域のイベントにも参加したい意向がある。	○	地域密着型サービスは、利用者が地域とつながりながら暮らしていくことを積極的に支えていくサービスである。近隣の住民との気軽な交流をしにくい環境ではあるが、事業所が少しずつ積み上げている支援に関する知識や実践経験を地域の人々に向けて活かしていくことで、さらに積極的な交流を模索する事が期待される。
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	昨年の外部評価結果は玄関に置き、職員や訪問者が自由に閲覧できるようになっている。改善すべき点については改善計画シートを作成し、緊急性の高いものから取り組み、すべての項目で改善してある。また、結果は家族にも配布し、運営推進会議でも報告している。今回の自己評価は全員で各項目について話し合い結果をまとめている。		
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月ごとに運営推進会議を開いている。利用者・家族・地域住民の代表者・行政関係者・副施設長・管理者・計画作成担当者等の参加があり、利用者の生活状況・ひやりはっと報告・地域交流行事・外部評価の結果報告等を行っている。参加者からひやりはっと報告書等について質問があり、説明や意見交換をとおしてグループホーム運営に理解が深まっている。また、公民館長など地域の他の参加者についても検討中である。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	介護サービスについての問い合わせの電話や諸手続きを行う時に、機会をとらえて積極的に連携をとっている。市介護相談員の訪問については、まだ受け入れはない。		
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	2ヶ月に1回「ゆーかりメール」を発行し、日頃の暮らしぶりやお知らせ、生活目標等を連絡している。金銭出納についても個人別の台帳を作成し、面会時に説明し捺印をもらい、遠方の方は毎月郵送している。また、職員の異動状況については、面会時に新任の職員を紹介している。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居時の説明書類には、相談窓口と行政等の苦情受付機関を分かりやすく明示している。また、玄関に意見箱を設置して家族などの意見を把握する機会を設けており、提出意見や相談は職員に周知し話し合いを持ち、家族に説明するとともに記録として残して今後のサービスに活かしている。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	職員の異動は利用者にとってダメージになることを理解し、最小限にするように努力している。また、新任の職員には研修を行い、日勤で慣れてから夜勤に入る等の配慮を行い、利用者にもしっかり紹介をして混乱を少なくするようしている。		
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	運営者や管理者は職員の育成の必要性を理解し、外部研修への参加や施設内での勉強会への積極的な参加を促がしている。外部の研修受講者は復命書を提出すると共に、勉強会などで職員に伝達している。また、毎月の勉強会では担当を決めて話し合いを行っている。定期的な研修会以外にも感染症の対策など、必要時にはそのつど機会を設けて研修を行い、サービスの向上につなげている。		
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	指宿地区地域密着型連絡協議会を立ち上げネットワーク作りが始まったところで、現在1年に2回の開催である。新体制に引き継いだ今後も入会しながら係わりを持ち、外部の施設との交流を図りながらサービスの向上に努めたい意向である。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	法人内ですでに係わりのある方が在宅介護支援センターを通じて入居となる事が多いが、入居前に利用者や家族に見学に来てもらい、グループホームの雰囲気を見てもらったうえで入居する仕組みとなっている。入居当初は家族の理解と協力をもらい、外出や外泊をしながら利用者が徐々にホームに慣れるようにしている。		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	職員は、利用者や家族を介護されるのみの立場に置かず、農作業のアドバイスや料理について教えてもらったりしながら支えあう関係を作るように努力している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用開始時に家族や本人などから聞いたり書いたりしてもらった情報から、包括的自立支援プログラム・生活データを利用してより充実したアセスメントを行っている。また、毎月1回利用者や職員の意見交換会を開き、意見や要望を聞くようにしている。さらに、日頃の言動から気がついたこと、家族の面会時に聞いた事などを記録し、申し送りをして他の職員と共有している。		
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	面会時に聞いた家族の意見・職員の意見・受診時に得た主治医からの情報などを基に、個別の介護計画を作成している。できた介護計画は家族に説明し、同意の記名捺印をもらっている。しかし、担当者会議は職員のみで行い、利用者や家族は参加していない。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	介護計画は特に大きな変化がない時には6～12ヶ月で見直しを行っている。支援経過記録に毎月の経過(モニタリング)を記録し、3ヶ月ごとに評価を記載して次の計画につながっている。また、状態が変化した時にはそのつど計画の見直しを行っている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
3. 多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々々の要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	医療連携体制を活かして利用者の健康状態を小まめに把握し、身体状況の変化の早期発見につなげ、嘱託医との情報交換がスムーズに運ぶように配慮している。また、ふるさと訪問や受診時の送迎など、地域や昔からのかかりつけ医との係わりを保つために事業所の多機能性を活かした支援を行っている。		
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医は本人や家族との話し合いによって決めているが、家族の希望で主治医はすべて嘱託医となっている。また、毎週2回主治医の往診があり、24時間連絡ができるような体制を取り、緊急時にも対応ができています。眼科など主治医以外の受診の際に家族が付き添わず、職員が同行した場合には、受診後に必ず電話で結果を連絡するようにしている。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	入居時に利用者や家族に医療連携の指針について説明を行い、同意をもらう。基本的に重度化した時には、家族に説明をした上で病院を紹介することとなっている。また、面会時に家族に情報を提供し意向を確認している。緊急時の対応についてマニュアルを作成して職員の勉強会も行っている。		
1. その人らしい暮らしの支援					
(1)一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	一人ひとりのプライバシー保護については、さりげなく声掛けをするなど常に職員間で確認し、研修の中でも折に触れ取り入れている。また、記録物は事務室に保管し、毎日の記録は直接パソコンに入力することで来訪者の目に付きにくくしている。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	1日の流れはあるが、体調や希望に合わせた暮らしを応援している。外出や食事の献立に要望を取り入れるなど、希望に合わせた生活を支援している。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者一人ひとりの力に合わせて買い物・食事の準備・後片付けなどを職員と共にを行うなど、力を発揮する場面を作っている。また、職員と会話を楽しみながら一緒に食事をする、菜園で採れた野菜を使った料理をする、たまには外食を取り入れる等食事を楽しむ工夫をしている。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	入浴はほぼ週3回から4回であるが、利用者が希望するときには毎日入る事ができ、入居者の意向を考慮している。また、入浴の嫌いな利用者にも声掛けを工夫しながら支援している。		
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	各自持っているプランターの花に水をやる・掃除をする・玄関を掃く・スイカなど農作物を作る・干し大根を作るなどの場面作りをしている。また、「大人の計算ドリル」を利用し脳の機能低下を防止する取り組みを行っているが、利用者同士で採点をしコミュニケーションが広がるきっかけになっている。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	散歩・買い物・図書館の利用・自宅への帰宅など、これまでの生活としてとらえる外出の機会を設けている。また、利用者の希望に応じての支援であり、元気な人はほぼ毎日外出する人もいる。戸外へ出るために一人ひとりのプランターに花を植え、水をやるなど工夫をしている。		
(4) 安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	職員は鍵をかけない暮らしの大切さを理解しており、外出傾向のある利用者を把握し、職員が常に目の届く範囲に居る様にしている。また、ホーム内にいるかどうかの確認チェック表を作成し、定期的に様子を確認するようにしている。		
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	毎月、グループホームの避難訓練を出火場所や天気など様々な条件のもとで役割を決めて実施している。また、年2回は法人全体で避難訓練を行い、緊急連絡網を確認したり、近所の方の参加を募って実際の災害に備え実践的な訓練を行っている。災害に備えた備品については、飲料水や食品を同敷地内の特別養護老人ホームに準備している。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者の食の好みや嚥下機能の状態を把握し、食事を楽しく食べるように工夫している。また、毎食の摂取量や飲水量を記録し、毎月体重測定を行い、職員全員が利用者の状況を共有するようにしている。味付けや栄養バランスについては管理栄養士にアドバイスを求めている。		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1)居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	室内は明るく、カーテン越しに暖かい日差しが差し込んでいる。テーブル・ソファ・こたつなどを置き、気に入った過ごしやすい空間を提供してお雛様や季節の花などを飾り、利用者がくつろいでいる。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	テレビ・椅子などの使い慣れた家具や小物・写真などを飾り、その人らしい居室であり、居心地良く過ごせる工夫がある。また、希望に応じてたたみ敷きの部屋があり、落ち着いた雰囲気がある。畳の部屋では移動時の事故がない。		